



たのでした。姉をご推薦くださったのはこの中村先生でした。李家市長さんからはわざわざ長文のお手紙までいただいたのですが、姉は身分が違うからといって、とうとうご辞退したのでした。もし姉が下関に行っていたら中根式速記協会の顧問になっていたのだいていた李家 孝さんとは義兄弟になっていたのです。孝さんは李家市長さんの長男で、亡くなったお母さんは戦時中、長崎県の愛国婦人会の会長をされており、私の母が亡くなった時は弔辞や香典などいただいた方でした。中村先生は姉が立派な人だったことをよくご承知であったためご推薦いただき、李家市長さんから直接お手紙までいただいたのですが、姉がご遠慮したのは大変申し訳なく思っています。李家 孝さんにはこのことをお話したことがありますが、大変ご親切にしてくださいました。

大正四年頃、兄が京都の第三高等学校に入学しているときです。私も京都に行っていたのですが、学資が足りないため長崎に帰って事業を起こそうと思ったのです。兄にはそんなことを何にも言わないで帰ったのです。私が長崎にいないでも収入があること、資本金は要らないこと、そういうことを考えた結果、牛乳店をやるうと思っただけでした。姉が勤めている学校出入りの牛乳店から牛乳を安くしてもらい、それを苦学生：今のアルバイト学生を頼んで配達してもらおう。監督は姉さん達にやってもらおう。牛乳は一合、四銭五厘のを一銭五厘でわけてもらおう。そうすると一合で三銭ずつの利益がある。得意先さえあれば相当